

投資事業評価調査書（新規）

部課室名	県土整備部土木局 道路建設課	記入責任者職氏名 (担当者氏名)	道路建設課長 多田 智 (課長補佐兼県道係長 吉村 文章)	内線	4362 (4376)
------	-------------------	---------------------	----------------------------------	----	----------------

事業種目	道路	事業名	事業区間	総事業費	約30億円
		道路改築事業 主要地方道 三田西インター線	三田市溝口～長坂	内地地補償費	約10億円
		所在地	事業採択 予定年度	着工予定 年 度	完成予定 年 度
		三田市溝口～長坂	平成18年度	平成18年度	平成25年度
		事業目的	事業内容		
		<ul style="list-style-type: none"> ・国道176号と舞鶴若狭自動車道三田西I.Cを直結し、国道からの広域交通の集約と高速道路へのアクセス向上を図る。 ・JR福知山線踏切を平面横断することがないバイパス整備により、安全で円滑な交通を確保し、踏切事故防止や消防・救急救命活動を支援する。 ・国道176号と県道テクノパーク三田線・黒石三田線を連絡することにより、梯子状の道路ネットワークが形成され、既成市街地と開発地との連携、均衡ある発展に寄与する。 	道路改築（バイパス） L = 857 m （うち橋梁部 L = 220 m） 【計画幅員】 土工部 W = 6.5 (15.5) m (2車線+両側歩道) 橋梁部 W = 6.5 (14.5) m (2車線+両側歩道) 【現況幅員】 W = 4.0 (5.0)m 【計画交通量】 11,200台/日 【現況交通量(H11セカス)】 8,264台/日 【負担割合】 国：5.5 / 10 県：4.5 / 10		
評価視点		評価結果の説明			
(1)必要性 県土の活用を進める		<ul style="list-style-type: none"> ・国道176号から舞鶴若狭自動車道三田西 I.Cへ向かう大型車は、大きな迂回を余儀なくされている。I.Cに直結することにより、高速道路へのアクセスが飛躍的に向上するとともに、新たな道路ネットワーク・流通経路が形成される。 			
安全・安心の確保		<ul style="list-style-type: none"> ・長坂中学校、本庄小学校へ通学する児童生徒は、市道長坂溝口線を利用している。この市道は、幅員狭小で歩道がないため、車両と通学児童生徒が混在し、危険な状態にある。このため、歩道を設けたバイパス整備により、安全な通学路が確保される。 ・JR福知山線を立体交差することにより、安全で円滑な交通が確保され、踏切事故も解消される。さらに、三田市消防署西分署が管轄するJR福知山線以西への移動が容易となり、迅速な消火、救急救命活動の強化が図られる。 			
くらしと交流を支える		<ul style="list-style-type: none"> ・国道176号沿線の既成市街地と県道テクノパーク三田線に沿って点在する開発団地を結ぶ東西幹線道路は市道北摂中央3号線のみであることから、新たな東西幹線として、地域の交流・連携強化が図られる。 			
地域ニース		<ul style="list-style-type: none"> ・第3次三田市総合計画で広域的な幹線道路網の整備を取り上げ、三田西インター線((都溝口須丸線)の整備促進を強く求めている。 			
(2)有効性・効率性					
有効性		<ul style="list-style-type: none"> ・費用便益比 B / C = 2.0 			
代替性		<ul style="list-style-type: none"> ・国道176号と三田西I.Cを直結する最短ルートとして都市計画決定されており、円滑な交通処理が可能な当ルートが最適である。 			
効率性		<ul style="list-style-type: none"> ・平成17年3月に都市計画決定済みであり、それまでの過程で幾度となく地元説明を実施しており、事業に対する地元理解、三田市の協力等、円滑な事業執行環境が整っている。 			
(3)環境適合性		<ul style="list-style-type: none"> ・盛土法面、植樹帯は周辺環境に配慮した緑化を行い、歩道には、自然環境の保全に配慮した透水性舗装を施工する。 			
(4)優先性		<ul style="list-style-type: none"> ・市道北摂中央3号線以北における国道176号から三田西I.Cへのアクセス道路はJR平面踏切を含む未改良区間があり、円滑なI.Cアクセス道路の整備が急務である。 ・未改良区間がありながら交通量が多い、現道を含む周辺道路は、小・中学生・高校生の通学路となっており、通学児童生徒の安全確保からも早期整備が必要である。 			